

“怒りのぶどう”の社会的背景（二）

山 県 敏 夫

前にも述べた通り、此の作品の背景として歴史的⁽¹⁾風土的条件⁽²⁾や、作家自身のイデオロギーの本質なども深く掘り下げねばならないのは論をまたない⁽³⁾。又、聖書の現代的アレゴリーとしての作品の構成上の問題についても色々論じられている⁽⁴⁾。

しかし、まず第一に此の作品の生れた 1930 年代のアメリカ社会の現実と、同時代の作家達に見られる一般的な傾向とを知って Steinbeck のおかれていた普遍的な条件を考察することが必要であると思われる。

“怒りのぶどう”は旧約聖書とその原型において全く同一であるといえる。原型とは、人間が集って構成する社会において、その社会史のはじまるとともに起った人間社会の葛藤の一つの基本的な型という意味であり、その意味では、“怒りのぶどう”は一つの集団社会における人間生活の運命的ともいえる深い欠陥を、普遍的な面でとらえているのである⁽⁵⁾。社会的苦難は、時代と場所を越えて常に存在する人間社会の悲劇なのであって、30年代の社会を見つめることによって、30年代の作家には当然、斯く表現されなければならなかった必然性があったと、云えるであろう。——とは云え、Steinbeckは小説を書いたのであって、社会問題を提出したのではない。対象が文学にある限り、すべてが割切れ、片づいたのではない。アメリカの文学が、その社会的現実と素朴簡明に結びついていることは明かだ。この事実を足もとに踏まえて、ここから発生する文学に眼を向けなければならない⁽⁶⁾。

Steinbeckの多様性ということが、しばしば述べられているが、それは、此の作家が概論をきらい、個性的なものを尊んだからで、人種や民族の特異性には、かなり敏感であったようだ。これは、彼が人種とか民族というものを概念としてではなく、動かし難い事実として、とらえていたためであろう⁽⁷⁾。此の作品も普遍的な面で、とらえた社会的現実を作家としての彼が、積極的に表明したものであり、作品発表後、依頼された California 農民の実状に関する政治論文を、彼は、「一般論はすぐ馬鹿げたことに固まってしまう。作者にとって云える

ことは、今日の時点で自分には、こう思えるということだけだ。」と答えて、その依頼を謝絶したということが、リスカ (Peter Lisca) によって報告されている⁽⁸⁾。

話が、飛躍してしまっただが、本題にもどって、1920年から30年代にかけてのアメリカ社会に、眼を向けることにする。

わが国では、第二次大戦を経験して初めて世代論が問題になり、また、戦後派と呼ばれる作家たちの出現をみたが、アメリカでは、第一次大戦後に、「戦争の世代」ということがいわれ、その世代に属する者の中から、次の時代を代表する詩人、作家たちが現われた。かれらのことを、ガートルード・スタイン (Gertrude Stein) の言葉を借りて、しばしば「失われた世代」(Lost Generation) という⁽⁹⁾。

「失われた世代」とは1890年代のなかごろに生まれ、だいたい1918年前後に大学をおえ、世界大戦に参加して、身をもって戦争を体験した一群の人々のことをさすが、かれらは戦争がすむと、多くのものは、そのままヨーロッパにとどまり、一度アメリカへ帰国したものでも、一二年するうちに、再び旧大陸に戻って行く者が、少なかった。戦争と、ヨーロッパ文化の影響が、この世代の特質を形づくっている。かれらは、戦争の結果、政治に不信をいだき、社会に対しても積極的な関心をもてず、戦後の混乱のなかにあって、人生の方向を見失い、わずかに、自我を唯一のよりどころとして、生きる道をさがし求めようとした。

当時の作家達は、創作によって個性を表現するのが、人生における主要な目的であると考え、文学上、さまざまな実験を試みた。かれらは、強烈な刺戟を酒や女に求め、そういう享樂的で、利己的な生活の中から、ある者は、平凡な生活に立ちかえり、あるものは自殺することによって自我を完成したのに対し、一部の者が、人によって、ゆき方は違うが、新しい文学の中に、自我を表現することに成功した。それが、その時迄の主流であったルイス (Sinclair Lewis) らの文学とは異なる戦後文学である⁽¹⁰⁾。

この「失われた世代」に属する人々の中には、小説家では、フィッツ・ジェラルド (F Scott Fitzgerald), ワイルダー (Thornton Wilder), ブロムフィールド (Louis Bromfield)⁽¹¹⁾。

詩人では、カミングズ (E.E. Cummings), ハート・クレイン (Hart Crane), マクリーシュ (Archibald MacLeish)⁽¹²⁾。

批評家では、ウイilson (Edmund Wilson), カウリー (Malcolm Cowley)⁽¹³⁾

などがいるが、なかでも最も重要な作家として、ヘミングウェイ(Ernest Hemingway)、フォークナー(William Faulkner)ドス・パソス(John Dos Passos)の三人を、あげるのに異存はないと思われる⁽¹⁴⁾。

先にも述べたように、アメリカ文学の世代的系列からいうなら、1885年生れのルイスを代表とする時代のあとに、ヘミングウェイ、フォークナーなど第一次大戦後のいわゆるロスト・ゼネレーションの時代が、やって来て、そのあとに、20世紀生れのSteinbeckやウルフ(Thomas Wolfe)、ファレル(J. Thomas Farrel)、サロイヤン(William Saroyan)、コールドウェル(Erskine Caldwell)たちが、30年代作家として登場するわけである⁽¹⁵⁾。

30年代の代表的な作家としてのSteinbeckについて、その社会的現実を理解するためには、当然、20年代作家についての考察を、なさねばならない。

20年代のアメリカの作家が、当時、フランスの若い作家達に、狂気のように迎えられたということ、谷口陸男氏が書いておられるが、極めて興味深い⁽¹⁶⁾。

フランスの多くの批評家たちは、アメリカの新しい文学のもっている異質性に、完全に驚いたという。そして、ルイスもブロムフィールドも、パール・バック⁽¹⁷⁾も果たし得なかった本質的な影響を、それらの新文学は、フランスの若い作家たちに与えた。例の有名なアンドレ・ジイドの言葉——「フォークナーはアメリカ文学の新星座の中で、最重要の星である」——や、ジャンポール・サルトルの言った「フランスの若い作家達にとって、フォークナーは神である」と云う言葉は、何れも、この事実を裏書きするものである。

さらに、ジイドは、その『架空のインタビュー』の中で、新聞記者に、フォークナーその他の作家について、次のように云わしめている。その言葉は、われわれが、ここに考察しようとするアメリカ・リアリズム文学に多くの問題を提供するのであろう。

“ヘミングウェイについては、あなたの言葉を、認めます。なぜかといえば、彼は、あの連中の中で、最もヨーロッパ的であるからです。ほかの作家達については、その異常さが、この私を、ぞっとさせることを白状しなければなりません。フォークナーの「サンクチュアリー」(Sanctuary, 1931)や「8月の光」(Light in August, 1932)を読んだとき、私は苦痛と恐怖の余り気が狂うのではあるまいかと思いました。ドス・パソスは私を窒息させます。なる程、コールドウェルの「巡回牧師」(Journeyman, 1935)や「神に捧ぐる一エーカー」(God's Little Acre, 1933)を読んでいる時、私は

思わず、笑い出しましたが、その笑いのあとで、しょげかえってしまいました。……もし彼等の云っていることを信じるとすれば、アメリカの市や田舎は、地獄を思わせるものがあることになります。”

このような、ジイドの言葉は、われわれに多くのことを考えさせる。なかんずく、最後の「もし彼等の云っていることを信じるとすれば……云々」というところは、特に多くの問題を、はらんでいるように見える。なぜならば、これらの作家は、いずれも、アメリカ・リアリズム文学の代表的な作家であり、従って「彼等の云っていることを信じる」ということは、とりもなおさず、その作品の中に、リアルなアメリカのすがたを見ることであって、ここには、作品の中に描かれたアメリカが、そのまま現実のアメリカかどうかという問題、つまり、作品は、現実を写す鏡であるかどうかという、リアリズム文学にとって基本的な問題が提出されていると考えてよいと思う。

次に、作品の中に描かれたアメリカの市や田舎が、現実のアメリカの、そのままのすがたであるかどうかは、解らないとしても、すくなくとも、作品そのものの中には「地獄を思わせるもの」があり、アメリカ現代リアリズム文学は、殆んど例外なく、死臭を放っているように見えるのは事実である。コールドウェルやドスパソス、フォークナーは云うまでもなく、最初の「最もヨーロッパ的」と呼ばれたヘミングウェイさえも、地獄の匂いと、死臭を放っている点では、決して、例外ではない⁽¹⁸⁾。

だが、もし作品が、現実の鏡でないとすれば、どうして、アメリカの現代リアリズム文学の作品が、死臭を放っているにもかかわらず、フランスの若い作家達に、狂気して迎えられたのであろうか。これらの問題が、アメリカ・リアリズム文学の性格と、世界文学に於ける、その位置を明らかにしてくれるのでは、ないだろうか。

シンクレア・ルイスの場合には、その夢が対社会的に、極めて明確であり、従って社会の変革に対する意欲を強くはらんでいた。アンダスン (Sherwood Anderson, 1876~1941) に至って、それは、あいまいなものとなり、社会変革の意志を、持ちながら、半ば社会の必然性を、認めざるを得なかった。そしてヘミングウェイやフォークナーに至っては、その夢は、完全に消えさり、従って、社会の変革に対する意欲などは、どこにも存在しなくなった。

「失われた世代」の作家たちが、このように不毛な世界と、呪われた人間だけを、描くのは、何故なのか。それは 20 世紀の世界と、人間生活が、そのよう

なもので、あるからにはほかならない。19世紀に、信頼されていた科学と、実証主義の収獲が、このような結果であったのである。

20世紀の歴史的経過が、きわめて急速、かつ、深刻に、現代アメリカのさまざまな重要問題を露呈していった時代が、すなわち2つの大戦に、はさまれた約20年の期間であると云える。この時期には、かずかずの世界的な事件によって、アメリカの伝統的な楽観主義が、はなはだしく、ゆらぎ、懐疑や、不安が、人々、ことに知識階級の人々を、ゆさぶった。一方、より現代的な意味でアメリカ人としての自覚が強く促されたのである。

第一次大戦後のアメリカは、ヨーロッパ諸国の疲弊によって、好景気をよび巨大な産業資本は、急激な繁栄をもたらした。新しい社会のもたらす、新しい「繁栄」を背景に、国をあげて、逸楽に身をゆだね、ドルの力の優勢に乗じて、ヨーロッパ、ことにフランスのパリに、おしわたって、いわゆる「ジャズ時代」の、はなやかさを、国の内外に、まき散らした。

だがしかし、こうした、かずかずの表面的な繁栄のかげに、それと裏腹になった精神的な不安定さが、つきまどっていたことは、おのずから明らかである。ことに大戦そのものに参加した若い世代（ロスト・ゼネレーション）や、知識人たちは、こうしたなりゆきには、おそらく自分たちも抱いていたであろうアメリカ的な、素朴な、理想主義と、楽観主義にたいして、底深い懐疑と、幻滅を感じたに違いない。

やがて、この異常な好況は1929年秋の株式市場大暴落と、それに続く30年代の陰うつな一大不況を導くのだが、そうした来たるべき危機が、表面的な「繁栄」のなかにも、すでに予兆されていないはずはなく、国をあげての快樂主義的な享樂には、こうした意味での危機感と不安感も、また、根深く、まつわりついていたことを、否むことは出来ない。フィッツゼラルドの“The Great Gatsby”は、その間の、不安と矛盾を、よく物語っている。

先にも、述べた通り、若い世代や、知識人たちの懐疑と幻滅は、彼等の多くをして、アメリカそのものに愛想をつかさしめたのである。戦後、間もなく、このアメリカ社会を嫌悪して、まだ個性と、豊かな文化的伝統の残っているはずのヨーロッパへ、とくにパリへと、陸続として、大西洋をわたっていった。

しかし、この文化的亡命も、けっして、現実的には、その充分な実を結ばず、やがては彼等も、かって嫌悪したアメリカに帰還しなければならなくなるのだが、1920年代前半には、ヨーロッパへわたらなければ、知識人に非ずといった感さえあったのである。

だが、こうした現代文明の問題は、けっして、たんに、アメリカ合衆国のみ
に留まるものではなかった。先の文化的亡命者たちの不可避的な、アメリカ帰
還が、示しているように、ヨーロッパにも、その濃い影を落とし、いわゆる
“西欧の没落”ともいうべき、危機的な状態に落ちいていたのである。そうし
た普遍的な状態を、いち早く、見ぬいて 20 世紀の世界の新しい、しかし、ど
こか空漠とした精神風土を、みずみずしい韻文でとらえたのは、他ならぬ「失
われた世代」よりも、一足先にアメリカを捨てて、イギリスに移り住んでいた
エリオット (T.S. Eliot) であった⁽¹⁹⁾⁽²⁰⁾。

以上、ごく、大ざっぱではあるが新しい 20 世紀社会の到来をつげる 1920 年
代について、触れたのであるが、前述したように 1929 年の大恐慌をへて、あ
の陰うつな 30 年代の、大不況期に、はいり込み、社会不安、ファシズムなど
の危機的な状況のうちに、アメリカ精神特有のオプティミズムにも、ますます
深い懐疑と、ベシズムの影が、落ちかかっているのである。

前章で、ふれたように、アメリカ作家会議がその後も、37年、39年の二回、
催されたが、このような、左翼的な会議が開かれた、そのこと自体が、30 年代
文学の特質を、端的に物語っている。というのは、30 年代の文学は社会的関心
を著しく示しているからである。

30 年代作家の傾向と、社会的な背景については、次の章に、ゆだねること
にする。

(注)

- (1) “East of Eden”の中で、作者自身の家系について述べている如く、Steinbeck
は、母方のアイルランド人の血統に、多大の影響を受けたようであり、又、父はドイ
ツ系のユダヤの血を受けていたようである。
- (2) 作者の育った California の風土についての考察、及び、特に此の作品の基盤を
なす、Oklahoma を襲った大砂嵐 (1933 年) 等の自然の影響なども、考察されな
ければならない。(The Grapes of Wrath. Chapter I)
- (3) 1935 年に始められたマルクス主義者主催のアメリカ作家会議には Steinbeck は
出席した形跡もないし、社会主義者としての、個人的な活動も行なわれた様子はない。
(アメリカ史——井出義光著、山川出版社)
- (4) “怒りのぶどう”(河出書房) II-19 倉橋健解説。
 (新潮社) 大久保康雄解説。
- (5) 注(4)倉橋健解説参照。
- (6) “失われた世代の作家達” p. 229 谷口陸男著 (南雲堂)
- (7) “スタインベック序説” 稲沢秀夫著 (思潮社)

- (8) Peter Lisca, “The Wide World of John Steinbeck” (Rutgers Univ. Press)
 アメリカに於ける Steinbeck の評価が低いのに反撥して Lisca はこの本で、この作家を、非常に高く評価している。(高村勝治注)
- (9) Gertrude Stein(1874~1946) アメリカ女流詩人、小説家で “Lost Generation” の名付け親である。
- (10) 現代アメリカ文学は Sinclair Lewis
 [(1885~1951) (アメリカ最初のノーベル賞作家) 代表作 “Main Street” (1920)]
 によって開拓されたが、作風は 19 世紀的で、20 世紀文学に発展したのは次の世代である。(世界の文学——中野好夫著)
- (11) 小説家 Francis Scott Fitzgerald (1896~1940) 代表作 “The Great Gatsby”.
 Thornton Wilder (1897~), Louis Bromfield (1896~1956) (Lost Generation と同時代の作家であるが作風は穏健である)。
- (12) 詩人 Edward Estlin Cummings (1894~1962)
 Hart Crane (1899~1932), Archibald MacLeish (1892~)
- (13) 批評家 Edmund Wilson (1895~) Lost Generation の良き理解者
 Malcolm Cowley (1898~)
- (14) Lost Generation の代表的小説家 Ernest Hemingway (1899~1961)
 代表作 “The Sun Also Rises”(1926), “Farewell to Arms”(1929)
 “For Whom The Bell Tolls”(1940), “The Oldman and The Sea”(1954)
 William Faulkner (1897~1962)
 “Sanctuary”(1931), “Light In August”(1932)
 “Absalom, Absalom!”(1936), “The Mansion”(1959)
 John Dos Passos (1896~)
 “Manhattan Transfer”(1925), “U.S.A.”(1930)
- (15) 30年代作家 Thomas Wolfe (1900~38), James Thomas Farrell (1904~),
 William Saroyan (1908~), Erskine Caldwell (1903~)
- (16) “失われた世代の作家達”(注6参照)による。
- (17) Pearl Buck (1892~), 女流作家。代表作 “The Good Earth”
- (18) 注(16)に同じ。
- (19) Thomas Stearns Eliot (1888~1965), 代表作 “The Waste Land”
- (20) Kenneth & Lynn 編 “The American Society” 参照。
 その他の参考文献：アメリカ文学主潮(鈴木幸夫著)早大出版部、アメリカの社会(大橋健三郎監訳)東大出版会、危機の文学(大橋健三郎著)南雲堂、20世紀アメリカ小説の技巧(高村勝治編)南雲堂、“John Steinbeck” by Warren French (Twayne’s United States Authors Series 2)